

当館所蔵 橋口五葉「本を読む女」(鉛筆素描) について —歌麿研究から制作への試作として—

小 山 周 子*

目 次

- はじめに
- 1 橋口五葉「本を読む女」について
 - 2 五葉の歌麿研究
 - 3 「小伊勢屋おちゑ」への挑戦
 - 4 理想とする版画制作に向けて
- おわりに

キーワード 新版画 美人画 喜多川歌麿 小伊勢屋おちゑ 浮世絵研究

はじめに

橋口五葉(1881-1921)は、明治末から大正期に活躍した装幀画、新版画の画家として知られる。明治14年(1881)12月に鹿児島市に生まれ、明治32年(1899)に上京後、橋本雅邦(1835-1908)に日本画を学び、のちに同郷の黒田清輝(1866-1924)のすすめにより白馬会で洋画を学び、東京美術学校西洋油彩画本科へ進んだ。挿絵や図案にも取り組み、明治38年(1905)に夏目漱石の『吾輩ハ猫デアル』の装幀を担当し、以後、漱石をはじめさまざまな作家の装幀デザインを手掛けた。明治44年(1911)の三越呉服店での懸賞広告画募集で浮世絵風の美人画「此美人」が一等に入賞し、その名を広く知られるようになった。「此美人」(ポスター)に描かれる女性は江戸時代の彩色摺絵本を手にするが、同時期頃より浮世絵の研究も開始する。やがて、大正4年(1915)に新版画の版元渡邊庄三郎のもとで最初の木版画「浴場の女」を制作し、以降、自ら監督を行う私家版伝統木版の研究と制作に取り組んだ。「化粧の女」や「髪梳ける女」はその代表作として知られる。版画制作を続けるなか、大正10年(1921)2月、もともと病弱のところ感冒から脳膜炎を併発し39歳の若さで亡くなった。

本稿で扱う東京都江戸東京博物館蔵「本を読む女」(当館資料番号10000209)【口絵1・後掲図4】は、平成22年度に寄贈された版画・素描群の中の一図である。当館に収蔵されるまで、長らく五葉の親族宅で大切に保管されてきた。鉛筆による素描で、大正5年(1916)から大正9年(1920)頃までの時期に

*東京都江戸東京博物館学芸員

制作されたものだ。残念ながら五葉の早すぎる死により、版画化されるどころまでには至らなかった。

五葉は、新版画の制作とともに、浮世絵の研究、特に美人画の喜多川歌麿（1753?-1806）の研究に情熱を傾けた。数ある歌麿の美人画のなかでも、本稿の中心的話題である「木挽町新やしき 小伊勢屋おちゑ」を高く評価し、複数の論文に歌麿の傑作として紹介している。

本稿は、当館所蔵の本図が、歌麿研究から新版画の制作の過程のなかで描かれた試作と仮定し、まずは資料紹介を行うものである。これまで「大正の歌麿」と称されてきた五葉であるが、新版画の制作における美人画への傾倒から呼ばれたもので、作品から歌麿の影響を検証するアプローチは進んでいると言いはない。本稿がその研究の端緒となり、作家研究及び新版画の研究に寄与できれば幸いである。

1 橋口五葉「本を読む女」について

当館では橋口五葉の「髪梳ける女」「浴後之女」をはじめとして大正期の東京で創作された伝統木版である新版画を所蔵し、平成21年（2009）に特別展「よみがえる浮世絵—うるわしき大正新版画」展を開催した。その第一章では、他機関所蔵の作品を借用しながら五葉の展示を行った。なかでも鹿児島市立美術館所蔵の鉛筆素描をお借りしたことは大きく、当館所蔵作品などと共に紹介し、新版画の黎明から初期にあたる五葉の制作の実態を示すことが可能となった。その展示を五葉の親族にご観覧いただいたことが縁となり、翌年、当館に9点の版画、「本を読む女」（以下、本図という）を含む7点の鉛筆画素描のご寄贈を賜った¹⁾。

本図は、橋口五葉による3,000枚ともいわれるおびただしい数の鉛筆素描のなかの一図に位置付けられる。五葉の鉛筆素描画は、国内では鹿児島市立美術館を中心に、千葉市美術館などにも収蔵されており、一部は海外にも所蔵がある。描かれる対象の大半は女性で、その多くは裸婦像である。同じポーズを取らせ、時には違う角度からも、繰り返し描写を続けた。その結実として、木版画の美人画の完成を目指していたことは明らかで、大量の素描のなかの数点に版画作品までつながった痕跡が見受けられる²⁾。素描の制作の時期は、大正5年（1916）春に、新版画の第一作「浴場の女」を刊行した後から亡くなる前の大正9年末までの間とされる³⁾。その「浴場の女」については、五葉自身は出来映えにひどく不満で、完成作品100枚を版元の渡邊と折半し、自らの分のほとんどを焼いてしまったほどであったという。それを機に、より一層、浮世絵の研究への取り組みを深め、熱心な素描の修業を始めていったと考えられている。

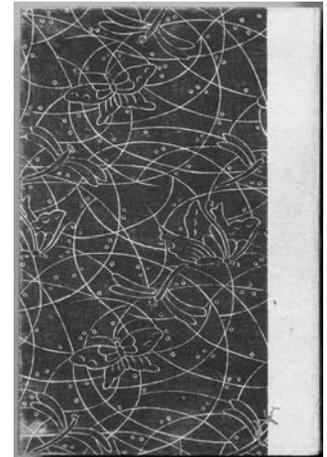
本図は、寸法が縦32.8cm、横29.5cmと正方形に近い形の画用紙に描かれ、これは当館のほかの6点及び他所蔵の鉛筆素描画にはない判型である。さらに内側に31.6cm×27.3cmの枠線がうすく鉛筆で引かれ、右手の甲がやや枠から出ているものの、この形での完成イメージの検討が行われている。画中右下には、「五葉」の朱印が押されるが、これは五葉没後の「五葉版画研究所」⁴⁾時代に押されたものである可能性が高い。

描かれたのは、浴衣もしくは薄衣を着た女性の読書姿で、この女性は「化粧の女」や「夏衣の女」【図1】においてもモデルをつとめた中谷つるである。手にするのは、その表紙デザインから靱山書店が刊

行した「胡蝶本」【図2】⁵⁾と呼ばれる五葉が装幀を手掛けた文芸小説にも見える。女性の上半身を大きく描き、着物の模様などはまだ下書きの段階であるが、顔の描写には陰影が付けられ、完成に近い段階に至っているように思われる。



【図1】「夏衣の女」 06200442



【図2】胡蝶本『新橋夜話』
国立国会図書館蔵

2 五葉の歌麿研究

本図の制作の背景には、五葉が没頭していたという浮世絵の研究、特に美人画の喜多

川歌麿の研究があった。五葉は、本人曰く、日本橋仲通りの浮世絵商村田金兵衛、神田淡路町の浮世絵商酒井庄吉のもとで数多くの浮世絵を見て、見識を深めたという⁶⁾。また、日本郵船株式会社幹部の三原繁吉の浮世絵コレクションにも関与した⁷⁾。自身も、数は多くはなかったようだが、肉筆画や歌麿を含めた広範な錦絵を所有していた⁸⁾。その浮世絵の研究は、広重からはじまり浮世絵史全般の広範に及んでいたが、中心には常に歌麿があった。歌麿に関する執筆は、時系列で並べると下記の【表】のとおりである。

【表】橋口五葉の歌麿研究 (主なもの)

年代	種別	書名、論題等	出版社、雑誌名・巻号等
大正4～5年	【雑誌論文】	「歌麿の画に就て」(一)～(十)	『美術新報』14巻8号～15巻12号
大正5年	【解説】	『歌麿名画集』	酒井好古堂
大正6年	【解説】	『浮世絵板画傑作集』	渡邊版画店 浮世絵研究会
大正6年	【解説】	『浮世絵風俗やまと錦絵』	日本風俗図絵刊行会
大正7年	【雑誌論文】	「歌麿の作風の変遷」	『浮世絵』31号
大正7年	【論文】	「歌麿の墓碑建設と其作品の年代とに就て」	『芸術説話二十題』
大正8～9年	【解説】	『歌麿筆浮世絵』	岩波書店

上記の研究において、五葉は画家ならではの視点で作品を分析し、線描や色彩、構図を検証し、作風や髪型、落款の変遷により年代を検討している。五葉の研究の姿勢はきわめて謙虚で、年代の検討にあたって、「作品を同時に、多く比較する事の出来ない場合が多いので、誤解した点もある事と思ふが、歌麿の研究者で、其誤解を訂正してもらへる人があつたら、甚だ有り難く思ふのである」⁹⁾とも記している。各作品の推定年代については、今日の研究における見解と異なる部分もあるが、作品の分析は綿密で実証的である。五葉の早世により、執筆は作品解説や雑誌論文にとどまり、著書の形でまとめられることがなかったことは残念なことであった。

執筆のなかで、傑作として選び推した作品は、現在も歌麿の名品として知られるものが多い。なかでも特に、五葉が高く評価していた作品に「木挽町新やしき 小伊勢屋おちゑ」【図3】があった。複数の解説や論文で同図を取り上げたが、大正6年の『浮世絵風俗やまと錦絵』での解説が最も簡明にまとめられている。

背面を雲母摺にし、人物の着衣と面白く調和させる方法も、或は歌麿の発明に成り、本図で初めて試みたものかと思ふ。此雲母摺の効果が世に広まつて寛政上半期には此試みが甚だ多い。

而して此種の試みの先駆としては、天和貞享頃の菱川師宣の作品で、雲母地の紙に墨刷したものに、墨色と雲母との配色の面白い調和を認めることができるが、歌麿も斯かるもの、研究から出発したのではあるまいか。

本図は顔面の描法にも研究苦心せる結果が見へ、衣服の描法も線を大胆に描き、これに縞を写すために繊細な技巧を用ゐ、互によく調和を保たせて居る。

色彩の配合も簡単明瞭である。作風には清長の感化もあるが、又彼独特の箇所もある。此時期に於ける彼の傑作の一として謝はあるまい。

おちゑは如何なる人であつたかは明でない。高島ひさを描いた如く、当時の美人として選んだ一人であらうと思ふ。¹⁰⁾

五葉は同作品を天明8年(1788)頃の制作と考察をしていたが、現在の研究では、寛政5年(1792)の娘評判記により、おちゑが当時18歳であったことが判明している¹¹⁾。それにより同作品も寛政5年頃の制作と判断されている。

「木挽町新やしき 小伊勢屋おちゑ」は島田鬻を結った茶屋娘おちゑが黄表紙を読む場面が描かれ、版元は河重で、同版元からは、「おちゑ」を含め4図が確認されている。娘評判記でおちゑは、「かさゝぎの橋うちわたりこびき丁おちゑがくむ茶のみに小いせ屋」と詠まれた¹²⁾ ことから、市中で人気の茶屋娘であったようだ。木挽町新屋敷は、現在の中央区銀座五丁目にあたり、近くには江戸三座の一つ森田座(寛政5年は、控櫓の河原崎座が興行)があった。

背景は白雲母摺で、左上に「木挽町新やしき 小伊勢屋おちゑ」と画題が入る。五葉が記す通り、大胆で大振りな描線は的確で、色数の少なさが幸いし黄表紙に目が向けられる。おちゑの眼はふんわりと目じりがすぼみ、柔らかな表情から本を楽しむ雰囲気が伝わる。実在した庶民の娘の読書姿が描かれる

のは、18世紀末という時代にしても珍しい。本図も喜多川歌麿の先進性を示す作品といえ、五葉が高く評価したこともうなずけよう。

3 「小伊勢屋おちゑ」への挑戦

大正4年(1915)6月、夏目漱石が知人への手紙の中で、「五葉は浮世絵を研究中ださうです。」と記したとおり¹³⁾、この当時、歌麿の研究論文を執筆中であった。そして連載が終了した頃、「浴場の女」も刊行し、その後から、研究の修練として鉛筆素描の制作への傾倒があった。

本図「本を読む女」を「小伊勢屋おちゑ」と実際の寸法の比率に合わせ並べてみたのが【図4】である。紙の判型は異なるものの、本を読む上半身を描く大首絵というばかりでなく、顔の大きさ、うつむく姿勢の角度、本を持つ手の位置まで、同じである。本図は、「おちゑ」を忠実に模倣しつつ、五葉の目の前のモデルの姿に描き起こしたものである。論文や解説の執筆で何度も取り上げた作品研究の実践と考えるとよいであろう。恐らく、モデルを鉛筆で描写するその傍らには、「おちゑ」を掲載した本や、あるいは写真があったに違いない。

黄表紙を読む評判の茶屋娘から、近代小説を読む女性へ、本図にて違和感なく転換し、その静謐な表情は五葉ならではの気品を維持している。胸や肩の辺りは実際の人間の体軀に合わせたがゆえに、錦絵の大判の縦長ではなく正方形に近い形へと変更し収まったものかもしれない。

完成作品ではないから当然のことではあるが、五葉の線には、まだ修練の途中の迷いや悩みが残って



【図3】喜多川歌麿
「木挽町新やしき 小伊勢屋おちゑ」
千葉市美術館所蔵

【図4】「本を読む女」 10000209

いる。数多くの鉛筆の素描にても、五葉は線を模索しながらくり返し引き進め、やがて一本の線となるべく探っていた。対して、歌麿のおちゑには、ゆったりとした襟元や細かな髪の毛の線描に、迷いは微塵も見られない。また、五葉の本を読む女性の目の端には、画家の存在を気にかけての緊張がある。アトリエの張り詰めた空気が伝わってくるようで、おちゑの黄表紙に入り込んで楽しんでいる様相とは異なっている。

それでも本図は、敬愛した喜多川歌麿の作品への挑戦を示す貴重な一作である。管見の限りではあるが、五葉の鉛筆素描の中で、本図と同じ構図の類似した作品は見られない。本図の修練がより進んでいった先には、ほかの素描と同様に木版画の制作があったのである。

4 理想とする版画制作に向けて

五葉は雑誌『美術新報』連載の論稿「歌麿の画に就て」最終回においても、「小伊勢屋おちゑ」を紹介した¹⁴⁾。

天明末より寛政十年頃迄は、彼れが木版の彫法及び摺方に最も注意を払った時期で、彼れの技術が自分の者となるに従ひ、彫法摺方等に関して研究する事が多かつた事と思はれる。彼れが婦女の半身像を錦画として出版し初めたのも天明八年頃で、半身像の背景を雲母摺にしたのも此頃である。(筆者註 句読点を適宜補完した。以下同。)

として、その傑作として「おちゑ」を挙げている。評価するポイントとして挙げた内容は『浮世絵風俗やまと錦絵』の引用とほとんど同じであるが、

彼れは、木版の彫法及び摺方に就て研究したる処多く、春信に依て体制された色摺木版術を更に進歩せしめる処が多かつたのである。

と、歌麿が研究によって錦絵の版表現を一層高めたことを評価した。そして、

今彼は、木版画製作に関しどんな方法をとつたか不明になつて居るけれど、其錦画の遺作及び甚だまれなる下絵及び校合摺の色ざし等に依て、自分の考ふる処では、彼は能く木版画の効果と云ふ事を考へ、其版画は肉筆画の製作とは幾分か方法を異にし、版下を作り彫工を能く監督し、其摺方に於ても初摺は摺師を能く監督したる事と思れる点が殊に多い。

と、歌麿自身が木版画の効果を知り、彫師、摺師を監督したのではないかという持論を展開している。

日本の木版画は、彫工及び摺師のあづかる処も小では無いけれど、画家が彫工及び摺師を監督する

だけの技量を有せざれば価値ある作品を作る事は出来ない。

ここには、五葉の木版画制作の理想がうかがえ、自らの木版画の制作と重ね、あるべき制作の方向性を模索している。歌麿が師宣や春信らの研究を行い成し遂げたように、自らも研究を蓄積すること、そして木版画について理解を深め、画家として彫師、摺師を監督すること、これにより自ら優れた木版画を生み出そうとしたのである。それを体現していったのが私家版の版画制作と言え、「化粧の女」「髪梳ける女」【図5】などの代表作含め生前11作品が摺り上げられた。これは、大正7年から9年頃の時期にあって、新版画の版元渡邊庄三郎を中心とした制作とは異なる一つの流れを形成したと言えようし、橋口五葉でなければ成し遂げられなかった研究から制作へ至る業績であった。



【図5】「髪梳ける女」 95202780

おわりに

本図「本を読む女」は喜多川歌麿「小伊勢屋おちゑ」の研究の実践的な試作と言え、版画家橋口五葉が理想とした新しい版画を生み出すプロセスの最初の段階にあったものと思われる。残念ながら、版画の下絵の段階には至っていなかったために本図のみが唯残される。五葉没後、親戚筋にあたる美術史研究の上野直昭は次のように追悼する。

彼れの一生は殆んど研究と努力であつたといふことができる。自製版画に至つて、試作が渾然たる本能的制作と合致したかの如き観がある。これが大成しなかつたのは彼れのみのでない遺憾ではあるまい。¹⁵⁾

本図も、もし版下の段階まで進んでいったのであれば、歌麿から直截にインスピレーションを得た新たな版画として完成していったのではないだろうか。

まずは、本資料紹介にて、当館に収蔵する本図の存在を紹介し、五葉のなかで、浮世絵の研究と素描の修業、そして木版画の制作がより密接に繋がるものであったことを記しておくこととする。今後、浮世絵の論稿、大量の鉛筆素描、そして版下段階まで進んだもの、完成作品、それぞれについて繋がりをより意識しつつ検証することにより、橋口五葉という画家について解明できることは多いであろう。ひいては五葉含める大正期東京における新版画あるいは木版画の勃興に関して正確な理解が深まるのでは

ないかと思われるのである。

【註】

- 1) 木版画は「耶馬溪」「温泉宿」「神戸之宵月」「夏衣の女」「爪を切る女」「浴後の女」「京都三條大橋」「着物をたたむ女」「カラス」の後摺合せ9点。鉛筆素描は「肩脱ぐ女」「横すわりの女」「本を読む女」「寝姿の女・女三態」「唐傘を持つ女」「浴衣を持ち立つ女・後ろ向きに立つ女」「肩ぬぎの女」の7点で、一部の作画が両面に描かれる。以上全て、当館ホームページ「江戸東京博物館収蔵品検索」(<https://digitalmuseum.rekibun.or.jp/edohaku/app/collection/search> 令和3年1月時点)によりオンラインでの閲覧が可能である。
- 2) 例えば、橋口五葉「浴後の女」完成木版画（大正9年7月）とそれに至る鉛筆素描2点（鹿児島市立美術館所蔵）がある（『よみがえる浮世絵—うるわしき大正新版画』（東京都江戸東京博物館、2009年）pp.38-39掲載）。
- 3) 西山純子「画業後半期の橋口五葉—新出資料を中心に—」（『生誕130年橋口五葉展』東京新聞、2011年）pp.178-183にて、橋口五葉が付けていた家計簿に大正5年7月以降「モデル代」の支払いが頻繁にあることが示される。
- 4) 橋口五葉の長兄橋口貢の長男で洋画家の橋口康雄（1903-1973）による主宰で、戦後、同研究所にて「温泉宿」など版下からの摺り上げや後摺りの制作が行われた。
- 5) 明治末から大正初めにかけて、靱山書店（京橋区築地・現中央区築地）が同じ装丁で刊行したシリーズ。すべて橋口五葉デザインによる蝶の表紙が採用された。永井荷風『すみだ川』『新橋夜話』、森鷗外『青年』など24冊。
- 6) 橋口五葉「歌麿の画に就て（一）」『美術新報』14巻8号、pp.10-14（複製版『美術新報』八木書店、1983年、pp.316-20）に「此三年位は病気がちで外出も出来無い日が多いので、従て多く見る事も出来ないが、唯個人で五枚或は十枚位を蔵して居る人の者や、古代錦画商村田金兵衛氏（日本橋区河瀬石町）や、酒井好古堂（神田区淡路町）等の宅に於て見たる者等に依て、研究したる者が重で」とある。
- 7) 五葉は、次兄橋口半次郎が日本郵船の造船技師だった縁から、大正2年から5年頃に同社のポスターやパンフレットなどのデザインを行った。大正9年4月には、三原繁吉が蒐集した浮世絵コレクションの展覧会目録の解説を執筆した。
- 8) 『浮世絵之研究』第2号（1921年10月）pp.21-24に、「五葉君遺愛品肉筆画目録」「五葉君遺愛品浮世絵版画目録」が掲載される。
- 9) 前掲、橋口『美術新報』p.14（複製版p.320）
- 10) 橋口五葉『浮世風俗やまと錦絵 錦絵全盛時代 下巻』（日本風俗図絵刊行会、1917年4月）p.9
- 11) 浅野秀剛『日本史リブレット21 錦絵を読む』（山川出版社、2002年）
- 12) 「水茶屋娘百人一笑」『東京新誌』第2号（書誌書目シリーズ24『東京新誌』ゆまに書房、1987、pp.95-97）より、「中納言家持 木挽町四丁目こいせやちゑ 十八 かさゝぎの橋うちわたりこびき丁おちゑがくむ茶のみに小いせ屋」。
- 13) 大正4年（1915）6月7日付、野間真綱宛漱石書簡（2033）に「五葉は浮世絵を研究中ださうです。此間光琳の200年の記念展覧会であひました」とある（『漱石全集 第15巻 続書簡集』（岩波書店、1976年、p.472）。五葉は、長兄貢が夏目漱石の熊本第五高時代の教え子で、その縁で上京後、兄とともに漱石と親しく交流した。「吾輩ハ猫デアル」の挿絵（『ホトドギス』）や装幀を手掛け、五葉は装幀画の第一人者として活躍するようになった。
- 14) 橋口五葉「歌麿の画に就て（十）」『美術新報』15巻12号、pp.1-6（複製版『美術新報』八木書店、1983年、pp.439-44）
- 15) 上野直昭「橋口五葉小伝」『浮世絵之研究』第2号（1921年、10月）pp.2-4。上野直昭は、東西の美学美術史研究で知られる。大阪市立美術館長、東京国立博物館長、東京藝術大学長など歴任。五葉の次兄半次郎の妻が上野直昭の妹にあたる。